

はじめに

かつて蝦夷地（北海道）には、1189年の源頼朝による奥州征伐から逃れた和人が住んでいたとされています。

鎌倉時代には、青森県十三湖（旧市浦村）を拠点にした蝦夷地管領の安藤氏が北海道を統治しており、安藤氏は蝦夷との交易のため、現在の上ノ国、松前、函館などを港として利用していました。この頃、松前の位置にあった港より太平洋側を『下之国』、日本海側を『上之国』と呼ぶようになり、それが本町の由来となっています。

今回の特集は、町制施行50年を迎えるにあたり、本町が北海道発祥の地と言われる理由について、歴史を振り返ってみたいと思います。

※函館市中央図書館所蔵



1430年頃、東北を支配していた安藤氏が蝦夷地管領として流刑人の監視や交易の拠点などの役割を持たせた十二の館を築いた事が大きな転機でした。

そして1456年、安藤氏より上之国守護に任じられ、道南十二館の内の一『花沢館』の主であった蠣崎季繁の元に一人の武将が訪れたことが、北海道に和人文が根付く大きなきっかけとなったと言われています。

北海道の“中心”だった上之国 その始まりの歴史

上之国の転機

14世紀頃、蝦夷は東北地方の豪族・安藤氏の支配地域であり、15世紀中頃に配下の蠣崎氏が花沢館を拠点として、上之国を統治していました。

しかし、1432年と1442年の2回にわたり、主君である安藤氏が、同じく東北地方の豪族であった南部氏との争いに敗れ、蝦夷地へ敗走してくる事となります。

その後、1454年に南部氏に捕えられた安藤政季と共に蝦夷地へと渡ってきたのが武将『武田信廣』であり、信廣は上之国の守護者であった蠣崎氏の客将として花沢館に身を寄せました。

信廣の蝦夷平定

それから2年後、志海苔（函館市）において、和人とアイヌの諍いから『コシャマインの戦い』が勃発し、その翌年、道南各地に築かれていた和人の砦「道南十二館」のうち、花沢館と茂別館以外の十館が攻め落とされる危機的状況に陥ります。

このままでは蝦夷地から和人が滅ぼされるという局面において、武田信廣の指揮する軍が花沢館を出陣し、現在の七重浜付近でコシャマインを討ち取り、戦いを終結させました。

統治に向けて

この功績によって、信廣は守護であった蠣崎季繁の義娘（主君安藤氏の娘）の娘婿として迎えられ、蠣崎家を継ぐこととなったのです。

そして姓が蠣崎となった信廣は、現在の砂館神社の位置に洲崎館を、その後夷王山中腹に勝山館を建て、上之国を拠点に蝦夷地の統治に乗り出していくこととなりました。

上之国と道南史

その時日本・世界では

1430年頃

渡党（わたりと）と称する人々が、各地に拠点の館を築く。（後の道南十二館）

1431年

武田信廣、若狭国の守護大名・武田信賢の子として若狭小浜青井山城に生まれたとされる。

※諸説有り

1453年

オスマン・トルコが東ローマ帝国を滅ぼす

1454年

南部氏との争いに敗れ、捕えられた安藤政季が、武田信廣と共に北海道へ渡海。

信廣は上ノ国を守護していた蠣崎季繁の客将として花沢館に入る。

1456年

コシャマインの戦い勃発

1457年

道南十二館のうち十館が陥落した中、武田信廣がコシャマインを討ち取り、戦を終息させる

1457年

信廣、蠣崎季繁の娘に婿入りし、蠣崎家を継ぎ、洲崎館を築く（砂館神社の近傍）

1462年

洲崎館の北に昆沙門天王社を創立（今の砂館神社）

1467年・1477年

応仁の乱（戦国時代始まる）

1470年頃

信廣、本町の夷王山中腹に勝山館を築城する。